高橋めぐみ著

「イエスのまなざし―アイデンティティーの喪失と回復」

評・前島　常郎

著者の名前から、「腹話術師」また「ニュー・クリエーション」というミニストリーを連想する人もいるだろう。高橋さんは、教会教育や児童伝道で活躍しただけでなく、大人向けの「ドラマ腹話術」という分野を創作したことでも知られる。

しかし、今の高橋さんは、人目を引く特殊技術を駆使しての巡回伝道者としての働きにはくぎりをつけ、これまでの人生をじっくりと振り返り、自分の存在意義を新たに見つめ直す作業をしておられるようだ。

「『私はだれなんだろう?』

私にとってこの問いかけはいつ頃から始まったのでしょうか。……

それはいつ、どこで、何をしていても心の深いところでうずき、それゆえに、私は『自分が本当の自分ではないような気がする…。自分が誰なのかわからない…』と感じ、常に地に足が着かない浮遊感のような感覚に悩まされていました。」(「はじめに」より)

「イエスのまなざし」には、高橋さんが「エリヤハウス」とどのように出会い、どのような学びをし体験をしたかがかなりのページ数を割いて語られている。

「父を亡くしてもう三八年も経つのに、だんだんと、時間と共に癒されてきていると思っていたのに、全然癒されていないとわかって愕然としてしまいました。むしろ怒りや悲しみが心の奥底では蓄積し、傷はますます深くなっているようでした」

そんなとき、「エリヤハウス」を知らされ、東京での「祈りのミニストリー・スクール」に出ることを決める。２００６年秋のことだった。心に抱えたものは、少なくなかった。

お父さんの早すぎた死を受け入れられない苦しみ。それにまつわる教会と牧師の対応に対する怒り。赦せない思い。

お母さんとのぶつかり合い。自分の誕生について50年以上も経ってから初めて聞かされる真実への驚き。

伝道者、腹話術師としては働くことができなくなるほどの病い。

他のどこでも話すことのなかった心の痛み、何十年も抱えていた疑問を、「祈りのミニストリー」では扱われた。自分では「解決した」と思っていた問題にも、新たな光が与えられ、「癒されている」と思っていた古傷にも、さらに深い癒しが与えられた。最後には「神の子ども」としてのアイデンティティーを、高橋さんは受け取ることができた。

本書は「エリヤハウス」についての格好な入門書とも言える。

著者には、『仮面を脱いで』『人生は、ドラマ』また『腹話術とのおかしな出会い』などもある。併せて読むと、著者の心の変遷がさらによくわかるだろう。

「イエスのまなざし ―アイデンティティーの喪失と回復」

B6判　161ページ
1,300円＋税　一粒社

本書はファミリー・フォーラム・ジャパンより販売しております